

第10回 建コン フォト大賞

あなたのお気に入りの“土木施設”

当協会では、広く一般の方々の土木施設への興味を高め、建設コンサルタントをより知っていただくために、2009（平成21）年度よりフォトコンテスト「建コンフォト大賞」を毎年開催しています。「あなたのお気に入りの“土木施設”」をテーマに、道路や橋、鉄道、上下水道、空港や港、公園や堤防など、私たちの日常生活を支える土木施設のある風景を撮影していただきました。

2018（平成30）年度も、当協会ホームページやフォトコンテストに関する情報提供サイトへの掲載、全国の高校写真部へのチラシ配布などで作品を募りました。その結果、全国の幅広い年齢層の方々から328点の応募をいただきました。

第10回を記念した今回は当協会と関係のある出版社および新聞社6社の協賛による開催とし、協賛企業による特別賞も設けました。

10年を振り返って

審査委員長 宇於崎 勝也

2009（平成21）年に開始された「建コンフォト大賞」も第10回を迎えました。10年前、建設コンサルタント協会（以下、建コン協）の広報委員会は新たな広報方法を模索し、「一般の方が積極的に参加でき、かつ普及しているデジタルカメラ等を媒体とした写真による『フォトコンテスト』が考えられる」として、開始された企画でした。審査委員は建コン協に業務等関わっていた者が推薦され、決定されましたが、最初の募集要領の作成には、審査委員も知恵を出し合うといった状況から始まりました。

初代の審査委員長は東京学芸大学名誉教授の伊藤清忠先生で、先生は既に世界中の世界遺産、土木施設、建築物を撮影に行かれており、応募作品の被写体である土木施設を熟知されていました。審査委員の日本大学工学部の知野泰明先生、日本写真作家協会員の初芝成應さんと私の3名は第1回からのメンバーです。ここに建コン協の広報戦略委員長が加わって毎回の審査が行われてきました。知野先生は土木史や土木施設の仕組みや役割に詳しく、初芝さんはプロカメラマンの眼で、応募作品が撮影時に

どのような苦労があったのかを推測され解説してください。私は専門が都市計画なのでひとり専門外のような気もしますが、応募作品に込められた想いなどを想像しながら審査をしています。第9回からは伊藤先生が退かれ、千葉工業大学の八馬智先生に加わっていただき、あわせて私が2代目の審査委員長に指名されました。八馬先生は建設コンサルタント会社に勤務されたこともあり、フォト大賞の意義をすぐに理解してくださいました。

第6回からは応募作品数が300点を超え、受賞作品を選ぶにも大変な労力を要する状況になりましたが、今回の第10回を迎えるまでに、順調に応募作品数を増やし、かつ、単なる土木施設の写真ではなく、作品内に動きやストーリーを感じさせる、味わい深く、感動をもたらす場面を切り取った応募作品が増えてきたように思います。また第3回目以降は様々な場所で展示会も開催されるなど活動も拡大されてきました。

これからの10年も建コンフォト大賞がさらに順調に発展し、その後も長く継続することを祈念します。

審査方法

ご応募いただいた作品は、審査委員（5名）および協賛企業審査員（6名）による審査会にて審査しました。

審査委員

審査委員長	宇於崎 勝也	（日本大学教授）
	知野 泰明	（日本大学准教授）
	八馬 智	（千葉工業大学教授）
	初芝 成應	（日本写真作家協会員）
	野崎 秀則	（建設コンサルタント協会広報戦略委員長）

審査結果

最優秀賞1点、優秀賞2点、特別賞10点および協賛企業特別賞6点を決定しました。入賞作品と講評は次ページ以降に掲載するとおりです。

協賛企業

- ・日経 BP 社 日経コンストラクション
- ・日刊建設工業新聞社
- ・日刊建設産業新聞社
- ・日刊建設通信新聞社
- ・建通新聞社
- ・日本工業経済新聞社

最優秀賞



「歴史の面影を感じて」

神奈川県 岡本 芳隆
（撮影地：山梨県甲州市勝沼町）

【撮影者のコメント】

大日影トンネルは、明治36年から平成9年まで中央本線下り線として使用されていたトンネルを遊歩道として整備されました。レンガ積みで造られたトンネルは、壁面にこびりついた煤煙、勾配標、キロポストなどがそのまま残され、明治の面影を感じることができます。残念ながら現在は老朽化が進み一時的に閉鎖されています。是非とも歴史的建造物を将来に残したいものです。長いトンネルの奥行を出すため広角でパンフォーカスで撮影しました。

講評

鉄道トンネルとして使用されていた大日影トンネルが、現在は遊歩道となっており、本作品では最奥の光差し込む出口までの距離感がたっぷり味わえます。手前には、往時をしのばせる古びたレールやスポットライトに照らされた待避所が鮮やかで、引き込まれるような魅力を感じます。（宇於崎審査委員長）

ほんのりと怪しく光る赤い壁が、脱出する映画スターの登場を待つかのようです。我が国のトンネル文化財がハリウッド映画のロケ地のように写し込まれました。マット・ペインティングが及ばない本物の迫力を感じます。（知野審査委員）

トンネルと線路による力強いパースペクティブと、照明がくっきりと浮かびあげたテクスチャーから、近代化土木遺産が有する重厚な歴史への敬意を感じます。左側にわずかに現れたレンガの色味が程よいアクセントとなっています。（八馬審査委員）

何処までも直線で敷かれている線路の直線美と、年代を重ねたレンガ積の壁面がライトに照らされて、黒光りと赤く光る避難場所の曲線がモダンに造られており、トンネルの暗いイメージを払拭したテクニックを知り尽くした作品です。（初芝審査委員）

1903（明治36）年から1991（平成9）年まで使用されていたトンネルを遊歩道として整備されたとのこと。明治の面影を感じ、また、歴史的建造物としての重厚さを感じます。（野崎審査委員）



「交差点模様」

大阪府 栗原 正隆
(撮影地：滋賀県大津市浜大津)

【撮影者のコメント】

この浜大津駅前交差点は、交通量が多い駅前の道路交差点上に京阪電鉄石山坂本線・京津線の軌道が重なり、電車が道路交差点内を4方向に行き交うというカオスな交差点です。
併用軌道が大好きな私のような路面電車ファンなら、いつまで見ても飽きない光景。
道路の直交に無理やり合わせた回転半径の小さな京津線軌道の90度カーブのエグさも強烈ですが、上から見ると、まるで地上絵？みたいな幾何学模様にも見えてくる道路に描かれた「道路標示」も美しい。

講評

路面電車が4方向に進むこの交差点では、軌道をうまく避けて自動車が行きかう必要もあり、路面上の標識が運転の手助けとなりますが、それがまた「地上絵」のようにも見えてユニークなシーンが現れています。(宇於崎審査委員長)

白と銀の線が交差点に車と電車のそれぞれを導きます。先に白い線が見えた人は車好き、銀色なら電車好き。土木施設版ルビンの壺ともいえそうです。地元の人でも入り込むには油断できない空間のようにも思えます。(知野審査委員)

市電の軌道と道路の標示、さらに建物の影という異なる秩序を持つレイヤーにあるラインが、幻想的な色調とともにグラフィカルに表現されています。水色の車両が登場させたことで、見る者を現実の世界に踏みとどまらせています。(八馬審査委員)

4方向に行き交う路面電車。欲を言えば交差点内の幾何学模様をしっかりと残して、車と歩行者も少し画面に入れれば、また違った臨場感が伝わってきます。とても興味深いアングルで撮られた、路面の美しさが表現されています。(初芝審査委員)

道路交差点内を歩きかう「軌道」と、幾何学模様にも見えてくる道路に描かれた「道路標示」。一見、カオスのように見えますが、道路標識が秩序を導き、不思議な空間を形成しています。(野崎審査委員)

「晩秋の煌めき」

奈良県 松元 澄夫
(撮影地：北海道河東郡上士幌町)

【撮影者のコメント】

三国峠で、早朝雪が降り、夜明けとともにすばらしい光景になり、シャッターを切った一枚です。

講評

三国峠の展望台から松見大橋を望むこのアングルは、応募作品でよく見る風景となっています。しかし、四季折々で美しさが異なり、本作品は雪景色に変わる一歩手前の晩秋の一面の紅葉の中で高架道路が力強く見えます。(宇於崎審査委員長)

朝焼けに浮かぶ雲が湖面に反射するかのような錯覚シーン。自然が織り成す晩秋の見事なトリックが写し残されました。その美しさが冬を迎えるのかもしれない。(知野審査委員)

S字線形を有する無骨で人工的なトラス橋が、北海道の彩り豊かな雄大な自然を引き立てています。定番の撮影スポットですが、秋と冬を行き交う峠の様子がよく表現されています。(八馬審査委員)

峠を見下し駆け上がる美しい紅葉群は、晩秋を惜しむ見事さもさることながら、まさしく土木技術しか成し得ない橋の彼方にいざなうが如く、強靱でしかもスマートに設計されている橋上の曲線美と見事に相まって、美しい一言です。(初芝審査委員)

早朝の三国峠。朝焼けの中で輝く紅葉とそこに浮かぶ松見大橋が幻想的。紅葉と手前の雪とのコントラストが実に美しいです。(野崎審査委員)

特別賞



「ファミリーで新森緑」

埼玉県 厚目 正

(撮影地：埼玉県比企郡ときがわ町大野)

【撮影者のコメント】

このキャンプ場にある砂防堰堤は、石組みで造られて自然の中にとけこむように設計されていると思います。新緑の中に鯉のぼりがあり、石の間から流れ落ちる風景がよいと思います。

講評

新緑の中の砂防堰堤。その前を鯉のぼりを見上げながら歩く親子。実に微笑ましく、ほっとする空間をとらえています。



「100年後の今」

京都府 本多 慎司

(撮影地：長野県松本市内田)

【撮影者のコメント】

この美しい砂防施設は、長野県の牛伏川うしづせがわに設けられています。明治から大正にかけ30年に渡って建設され、ちょうど100年前の1918年に完成しました。水害から人を守るための施設として作られましたが、自然との調和が素晴らしく地元癒しの場となっています。雑誌で見かけた折、一目惚れしたため現地に赴きました。

講評

100年前の1918(大正7)年に完成した砂防施設。周辺の緑と調和しており、また、木漏れ日に輝く流れと木陰のコントラストが美しく、癒しの空間を提供しています。

特別賞



「優雅な流れ」

茨城県 高田 良昇

(撮影地：茨城県常陸大宮市上伊勢畑)

【撮影者のコメント】

このダムは、放水ではなく、あふれた水が流れ出す方式で、流れ出す水の模様が美しく、何度か通ったが、なかなか流れる様子を見ることが出来ず撮影に苦労した。今年は台風が多かったのでやっと撮ることができた。

講評

きれいな波紋が滑り落ちる大きなオブジェ。ダム設計者のセンスと心意気を感じます。それを湖面までも輝かすシャワーのように活写した撮影者のセンスが光ります。



「楽しいロードアート」

神奈川県 川口 忠男

(撮影地：東京都中央区銀座)

【撮影者のコメント】

東京の中心を通る交通量が多大な西銀座通り1丁目～7丁目を歩行者天国にして、銀座柳まつりが行なわれます。7丁目では、子供達が幅広い通りをキャンパスに見立て、テープでアート作品を作ります。カラフルなアートで飾られた道路は、変わった顔が見られ楽しいひと時でした。

講評

西銀座通りの恒例イベント銀座柳祭りでの1枚。路面をキャンパスに見立てて子供たちが色つきテープでさまざまな落書きをした。日ごろ立ち入れない場所で落書きをする解放感、さぞ楽しかったことでしょう。

特別賞



「夢の架け橋」

和歌山県 中村 光雄
(撮影地：和歌山県岩出市)

【撮影者のコメント】
人々の夢をつなぐ京奈和自動車道建設。なかでも難所の深い谷間に架ける道路橋。英知を絞って建設中です。

講評

高い技術力が反映された橋梁架設における一時的な眺めをシルエットにして、一瞬しか現れないであろう絶妙な空の色とともに切り取ったことで、時間と空間の奥行きを感じる印象的な作品になっています。

特別賞



「夜明けの熊本城」

熊本県 河本 泉
(撮影地：熊本県熊本市)

【撮影者のコメント】
熊本地震で被災した熊本城。復興する様子を朝の光とともに撮影しました。早く元の姿になってほしいです。

講評

大事な基礎である石垣が崩落し宙に浮いた如何にも崩れそうな二の丸の様子と、大型クレーン2機が頼もしい姿を、あえて朝日に向け影絵の如く屋根瓦の先端も鋭くとらえ、土木と建築の技術の粋で見事によみがえることであろう作品です。



「日本橋の美林」

愛知県 大矢 信吾
(撮影地：東京都中央区日本橋)

【撮影者のコメント】
長い間、高速道路を陰で支えてきた橋脚と朝日に照らされ美しく輝く水面の情景がとても印象的でした。マングローブの林のようにも見えます。これまできっと多くの方がここを眺めて来たことでしょう。開発に伴い変わりつつある日本橋の風情。微力ながらその記憶を留めておきたいという思いで撮影しました。

講評

景観を損なうとして一方的に邪魔者扱いされながらも現代の物流を支えてきた高架橋と、過去の物流インフラである水面が作り出した光の魅力を浮かび上げることで、重層する都市ならではの景観の価値がそこにあると気付かせてくれます。



「人里離れ孤独に佇む」

北海道 大江 平次郎
(撮影地：北海道斜里郡斜里町越川)

【撮影者のコメント】
この橋梁は私が生まれた一年後に着工との事です。この工事に何人の人が携ったのか難航工事のため犠牲者がいたと思われる。当時のことを語る人はもういない。タコ部屋で強制労働をさせられ命を亡くした人が何人いたのか想像もつかない。昭和32年に斜里～越川間が開通。45年に廃線となる根北線は幻の鉄道となる。

講評

1939年に完成した第一幾品川橋梁は、ついに一度も使用されることなく、コンクリートアーチ橋がそのまま周りの風景に溶け込むように経年劣化しました。鉄筋が入っておらず錆から免れたことで味のある姿をつくり出しています。

特別賞



「曲線美」

三重県 谷口 純一

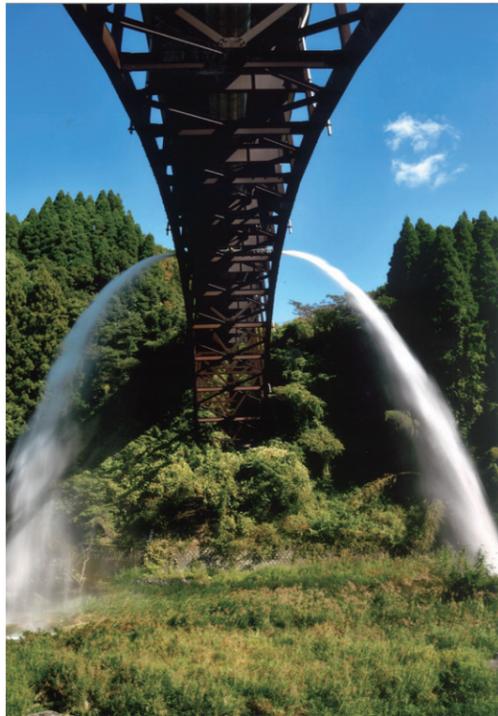
(撮影地：三重県四日市市天カ須賀新町)

【撮影者のコメント】

平成30年4月に開通した「四日市・いなばポートライン」は、その高架道路の曲線美や港湾風景との組み合わせが素晴らしく、開通早々に地元の新名所として定着しつつあります。港湾地域の物流機能の強化や周辺道路の混雑緩和や沿道環境の改善を目的としたこの道路自体が撮影スポットとなり、四日市の港湾夜景がますます魅力的なものとなりました。

講評

時として夜景の撮影では想像もつかない、色彩が現れることが多くあります。周囲の自然光に反応している様々なライトが織りなす変化が被写体の曲線美を、より魅力的に見せてくれる、楽しさがある美しい作品です。



「放水のアーチ」

福岡県 百瀬 可達

(撮影地：熊本県菊池市重味伊倉)

【撮影者のコメント】

この橋は、菊池川に架かる、上を車が走り、中に農業用パイプラインを抱える併用橋です。年に一度、パイプラインの掃除のため放水されます。放水がきれいなアーチになっているので撮影しました。

講評

江戸時代に造られた放水石造アーチ橋として有名な通潤橋。その近くにて現代技術が駆使された放水アーチ橋の豊潤橋も登場です。通潤橋が震災から立ち直るまで、熊本県民の心をきっと癒してくれることでしょう。

協賛企業特別賞

日経コンストラクション特別賞



「復興に挑む男たち」

福島県 門林 泰志郎

(撮影地：福島県いわき市小名浜港)

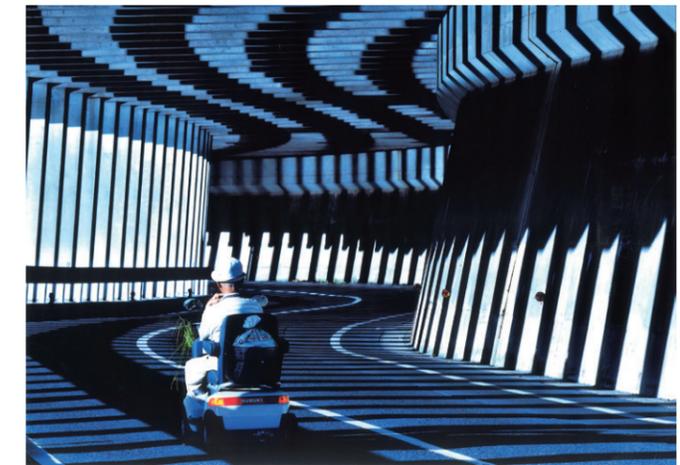
【撮影者のコメント】

いわき市小名浜は地震津波の大災害にみまわれ、今は完全復興にいたりました。今、大型商業施設のための鉄塔建設の現場です。

講評

寒空の下、東日本大震災からの復興工事を担う建設作業員たちの、ふとした瞬間を捉えました。各々の顔が見え、彼らの力強さが伝わってくる一枚です。鉄塔や架線の乱雑なラインと澄んだ青空のコントラストも美しいです。

日刊建設工業新聞社特別賞



「光と影がいざなう先へ」

岡山県 竹端 正伸

(撮影地：岡山県岡山市北区建部町川口)

【撮影者のコメント】

この写真を撮影した理由は、建設技術の高さと光が作り出した不思議な世界に魅力を感じたからです。私が撮影したところは、日没に向けて輝きを増す太陽光と隣を流れる旭川の水面からの反射光とが重なり、より一層光と影が蛇行した洞門に映し出されていました。この均等な影の並びから、建設技術の高さと芸術美を感じました。また、電動カートに乗ったご老人の目にはこの風景がどのように見えているのか、進んだ先に何か違った世界が広がっているのか、気になりました。この風景は、自然と人工の複合アートといえるでしょう。

講評

蛇行する洞門の柱からこぼれ落ちる太陽の光の中を、電動カートに乗って走る老人。住民の登場を介して、地域の足となる交通インフラの役割に焦点を当てながら、光と影の幻想的な空間を生み出す「構造物の美」の瞬間を切り取った優れた構図の作品です。



協賛企業 特別賞

日刊建設産業新聞社特別賞



「格子の橋」

神奈川県 加藤 いちご
(撮影地：神奈川県秦野市今泉)

【撮影者のコメント】

友達と秦野市を散歩した時に撮ったものです。秦野駅に降りてから公園をとりあえず巡ってみようということになり、一番最初に立ち寄ったのが今泉名水桜公園でした。季節はずれで紅葉などは見られませんが、鴨が泳いでいるのが観察でき、小さいながらも橋の造りはすてきでした。その橋の上から友達が遠くの鴨を眺めている様子が伝われば幸いです。

講評

池の中に浮かぶ木で造られた格子の橋。季節外れの公園の中でも存在感を見せてくれます。その橋の上で鴨を観察する友達は何を想っているのか。生活の中に溶け込む土木技術。若い世代がもっと土木に興味を持ってもらえることに期待したいです。



協賛企業 特別賞

建通新聞社特別賞



「夕刻の大栈橋」

神奈川県 伊藤 良一
(撮影地：神奈川県横浜市中区)

【撮影者のコメント】

夕刻の大栈橋には人が多くそれぞれの休日を楽しんでいるようでした。

講評

黄昏時の大栈橋。いま、屋上デッキでこの時を過ごす人たちの表情は見えません。しかし、残照が生み出す人影と「横浜三塔」の白いアルファベットが、いま、この時、この場所が、彼らの心を解放していることを、もの言うことなく、語っています。

日刊建設通信新聞社特別賞



「大黒柱」

愛知県 長谷川 敏則
(撮影地：愛知県名古屋市中村区)

【撮影者のコメント】

写真中央の橋脚上では、3本の道路が交差しており、橋梁下はロータリー形式の交差点となっています。柱頭部の鉢巻状のボルト群、力強く放射状の広がる主梁、そこから枝状に伸びる桁、何か生物のようです。周囲を建物で囲まれ、目立たない橋梁ですが、設計・施工における高度な技術に感動を覚えます。

講評

写真中央の一本の太い橋脚の上部は、3本の道路が交差。交差する道路の下も、一本の橋脚を取り囲むロータリー形式の交差点です。まさに題名通り、交差道路を支える大黒柱は、インフラの下支え役でもあります。

日本工業経済新聞社特別賞



「宝石箱の中の橋」

埼玉県 木之下 正美
(撮影地：埼玉県秩父市)

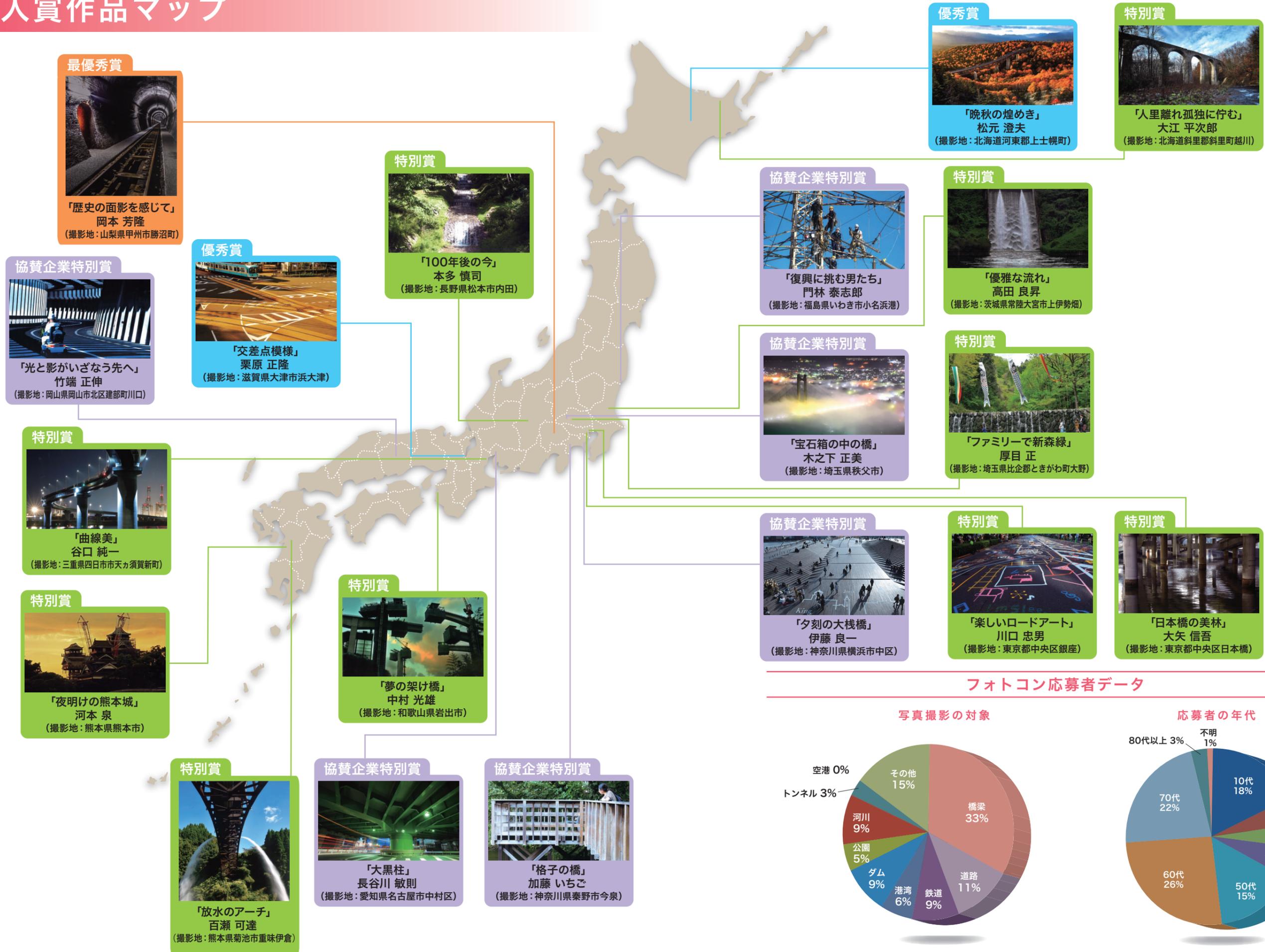
【撮影者のコメント】

秩父ミュージアムパークから見た秩父盆地の雲海です。日の出前の雲海ですが、秩父の街のいろんな色の灯が雲海の下に光り輝いて、まるで宝石箱をひっくり返したような美しさです。その中に、綺麗な幾何学模様の秩父公園橋が、アクセントとなっています。手前の林の緑も効果的な役割をしているように思います。

講評

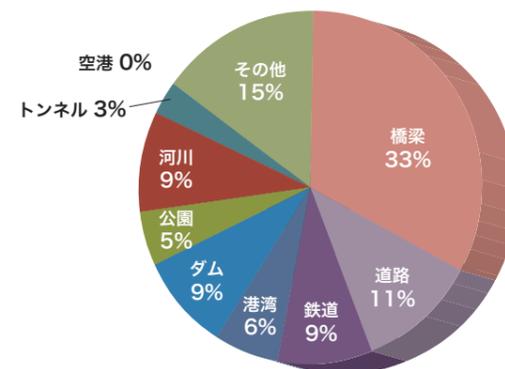
普段慣れ親しんだ街の土木施設と風景が、秩父盆地の雲海により幻想的な世界となっている様子を捉えた印象的な一枚です。

入賞作品マップ



フォトコン応募者データ

写真撮影の対象



応募者の年代

